
アロア戦記

どちら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アロア戦記

【Zコード】

Z4914Y

【作者名】

ひりひ

【あらすじ】

小さな世界に産み落とされた少年。そこは赤く染まつた果てしない戦いの世界。少年はその世界の中で何を見つけるのだろう。

初めての投稿です。気軽に感想を入れていただけないと励みになります。

序章 そんな小さな想い、の物語（1）

・そんな小さな想い、の物語

遠い遠い、ある日の夜明けの事。

「何ものをも通さぬものとは」のことだらう。」

はるか遠い暗闇の外にかすかに光が漏れる。

闇に幾ばくの不安も無く、暁にどれほど喜びもない。

ただ、今日の日はまだ見ぬ日を想おう。

ただ、明日の陽と降り注ぐ光が想い以上に広大な事を、とじめる事無く白色である事を願おう。

「明日」に想いをめぐらす事は常であった。それを夢想することで今自分の存在と可能性を求められた。数年ほど前はその様な場所で「えられなかつた。

「明日」があることすら奇跡であつた。

今日、いや、今があるのは一瞬前の自分がいたからである。今いる自分は一瞬後の自分を存在させる可能性でしかないのだ。その無数にある瞬間の狭間の一につに今日と明日、今日と昨日をまたぐものがあつたに過ぎない。

無数の奇跡の末に今日の自分が存在し、無数の奇跡を願わなければ明日の存在を夢想することすら叶わなかつた。

それを想う間も「えられなかつた男は、ただ今の自分を存在させることに専念した。

それから、13年が経つた。

日々に「常」なるものを見つけられる事は喜であった。そして、それを奇跡にも神にも願わずとも思えることが自分の存在でもあつた。

だが、田の前の暗闇は男から「常」なるものを奪い取った。

汗ばむ手が男をあの十数年前へと押し戻していく。

彼から奪い取る「時」は暗闇から溢れ出すだけではない。夢想したはずの暁の朝にも、それは自身を広げて行つた。

不意に「時」が男の瞬間を奪うこともあるが、男が自らその「時」の中に足を踏み入れる事もあった。

どちらも男の願うものではなかつたが、そのどちらも男が願うモノには必要な「時」であつた。男は願いもしないが拒みもしない。喜は無く哀はあるが見続けることを否だけで終わらせはしなかつた。

そして、今の「時」は後者である。

産毛から伝わる闇の深さが夢想の存在を遠くへ追いやり、瞬間のみに男の居場所を用意したのだった。

「明日はミリイが飯当番だつたなよな？」

ただ、奇跡の先を言葉にすることだけは許してくれるようだが。夢想の味を僅かばかりもにじませていない言葉は闇に溶け込むには調度良かつた。

「ああ、そうだつたな。ミリイの飯はあまり上手く無いんだけどな。」

だが、返つて来る言葉は喜びも暖か味も含む余地を含んだ言葉だつた。

人の言質の奥まで見抜く事に限りがある事は理解しているが、この返信の声に思いをめぐらす作業に時を費やす事は神も許してくれるのでないのか。

「なあ、そろそろその明日になるぞ。」

再びかけられたその声に導かれるまま首を左へ向けると、暗闇の空間を少しずつだが押しやるように光が漏れ出していた。

「ああ、明けるな。」

言葉だけの同意を漏らしながら闇を侵食する光に田を慣らす作業を急がせた。

完全な夜明けまで後1ルム半程だろう。

巨の変わり目は喜びをもらす。たとえそれが悲しみの中の代替時期できであろうと喜々を与えてくれる。

今はその喜々の中に身を漬すわけにはいかない。ただ、身に瞬間を乗り越える奇跡を与える光を呼び込むことのみが、今の彼には必要であつた。

「さて・・・行くか。」

数秒をかけた一言が間に転がされた。

闇より光が空間を支配したのを見極めたのであらう、吐いた言葉と同様の間を持つて体躯を上方へと持ち上げた。

眠気の誘惑から逃れられないのか、単に動作の感覚が他人より緩慢なのか、男の横に座り込む巨体はまだ陽と地の間隙に視線を貼り付けている。

「カルツェル。」

その言に、ようやくむやみな巨大さを持つ身体は動き出した。

「ああ、わかつてゐるつて。」

この大男は自らの名を告げられなければ、吐かれた言葉の着地点が自らである事すら理解できないのであらうか。

「ハムサン。」

次に呼ばれたのは先ほどよりも遠い場へ身を置いていた者の名だつた。その名の者、ハムサンは先のカルツェルと呼ばれた者に比して小さな体格であるが、それに反比例した速度をもつて声の元へと参じて來た。

「ペイジュエ公に出立するように伝達を頼む。」

参じた者を撥ね返すかのように令が下された。だが、彼へと向けられた言葉は「はい」と、最も短い言葉の部類であらう返答を生み出し、再び彼を先程より遠い場へといざなつた。

「行くぞ。」

三度目に投げかけた言葉は、その対象を無数に増加させたものだつた。その言葉の浸透と同速度で無数の対象の中に一律な音が鳴り響いた。声による返答を求めない言葉を吐いた男と同様の高さへ数

百に上る視線が持ち上げられた。

陽を背に男は進みだした。

汗が微かにひいた手が重みを増した剣柄へとかけられた。

「アロア。」

男の背を微かに引き戻す作用を含んだ声がかけられた。

「不味いかもしれないが、ミリイの飯を楽しみにしような。

場に馴染む努力を忘れた声がカルツェルの口から流れた。

「ああ。」

短い答えが背後にではなく、前方へと投げ込まれた。

「

序章 そんな小さな想い、の物語（2）

「眩しいな。」

その、ひときわ高い身体を強調するかのように背伸びした視線が、ようやく全身を表した朝日へ向けられた。

だが、残念な事に彼以外（おそらく全ての者）の視線はそれとは全く正反対の方向へと投げかけられた。そして、まるでいつもの事のように彼らはその大男の言葉の存在を無視して話し出す。

「やはり、イーメラタの方が僅かに多いかな。」

陽遮る森を抜けた先には山と谷、川に囲まれた草地が広がっていた。普段は生あるものたちの安息地になつていてるであろう、その草地を人はランタンと呼んでいた。

それは特に地名と言う程の冠ではなかつたが、ランタンと言つ赤く甘い果実を実らせる大樹がその草地のちょうど中央に根を張つていたため、土地の人に便宜的にそう名付けられた地であつた。

アロアラが森を抜けたその場所は敵陣を一望できる丘の先端であった。

本来彼らが配置された場所は今いる場所よりもう少し北西の川岸の地であつた。

「・・・本来、地の利は我らにあるはずなのに何故その地の利を使いませんのか？いや、むしろ、この陣営では地の利はイーメラタにくれてやるようなものではないですか。」

その怒氣、呆れ、失望、あらゆる負の気に満ちた言葉を吐いたのは今から10ルムほど前、夜の暗さが増してきた頃であつた。

アロアと対面する男の間には即席と一目でわかる、布に描かれたランタンの地図が広げられていた。

「しかし、な・・・アロア殿、これは王が決められたことなのだ。もう覆りはしない。ましてや、もう軍は支持通りの配置へと動

き出しているのだ。

「しかし……。」

苦虫を噛み殺したようなアロアのうめき声が流れたが、目の前の男は目を閉じ眉間にしわを寄せる事のみで敢えてこれを黙殺した。アロアにもそれは分かつていたのだ、もはや止める事など出来はない事を。だが吐く事によつて多少なりとも負の気持ちを和らげ、いや、それ以上に目の前の男より些少でも軍の動きに影響がある言が王まで伝わる事を期待したのもしれない。軍は止まらずとも心構えは今からでも備える事が可能なはずなのだ。

（そこまでは流石に無理か・・・ペイジュエ公も貴族の一人には変わりないのだ）

幕から遠ざかりながら心の中で嘆息した。だが、アロアにもそれは分かつていたのだ。ペイジュエ公が自らの話を耳に入れてくれるだけでも感謝すべきことを。普通ならば、他の貴族・諸侯ならば会話を交わすことも彼の意にならぬ関係であつたのだが。

仮にペイジュエ公がアロアの言を入れ、王にそれを伝えた時、王の不快を買つのは公自信なのである。さらにアロア達、傭兵紛いの者らの言により貴族が動いた事が知れれば王の不快は更に深刻さを増すであろう。

少なくとも表面上は自分たちと快く会話を交わしてくれ、彼らとペイジュエ公の隊の行動に対する、アロアの進言をこの先聞き入れるとさえ言ってくれた公に、危機を助長するまねを強要する事は出来なかつた。最も、強要しようものなら拒絶され、アロア等を卑下する態度を表面化した挙句、アロアらの隊を危地へ投入しようと増らするかもしけないが。

「いいか、今、赤い旗を掲げている隊がいるだろ?」

アロアの声が彼の周りに集まつた仲間2人へと投げ掛けられた。彼らの視線は言葉の中にあつた通り赤い軍旗が数十本、風に靡いている地点へと集められた。

「ああ、いるな。」

短い答えがアロアのすぐ傍から返された。妙に目の中の細い男であつた。「妙」と言つのは彼が普段から意識的に目を細くしている風があつたためだ。目が悪く凝らしているだけとも思えるが、前にアロアがそれを尋ねてみると、微かに不審な顔をして「いや、生まれ付き目は良い方だ。」とだけ言つと足早に遠ざかつて行つた。

だが、目が細いのは生れ付きでは無い事は分かつていて。試しにこの男に酒を飲まし理性を外してみると、目を見開いて騒ぎまくるのだ。アロアの中で永遠に解けないであろう疑問の一つだった。彼は名をムリエラ＝カサドラと言つた。

「あの地点だ。俺たちが目指す地点だ。覚えておいてくれ。」
アロアの静かな指示だつた。

だが、その静かなはずの言葉はそれを受けた者達に大きな反響を呼んだ。

「な！？」

第一声は皆ほぼ同時、同様のモノだつたがその後に続く言葉を吐いたのは先ほどの目の細い男だつた。

「おい、アロアわかつてているのか？」
大半を非難色に染めた問いかけだつた。
「わかってるって？」

非難の対象からの、惚けた顔と惚けた声。

「あれは、あの赤い幟はイメラタ本隊の軍旗だろ？が。」

「ああ、そうだな。」

ムリエラのその熱した吐息を完全に無視したかのようなアロアの返答。

「あそこに突っ込むつもりなのか？」

「ああ。」

再び同じ声色がアロアから漏れた。

「『ああ』ってな・・・。」

微かに嘆息したような声を漏らしたムリエラは、その煮えきらぬ

表情をアロアから眼前の赤い旗の靡く一帯へと向けた。

赤い旗の下に集まつた隊は少なく見ても1000人は下らない騎士と従者によつて構成されていた。彼らの隊の20倍はいるであろう。そして、アロアらとの違いを最も表現するものとして彼らを構成する人の、正式な「騎士」である事が誰の目からも窺えた。イメラタ族と言う、アロア等とは違う主従環境において「騎士」というものが存在するのかは判らない。だが、目の前の隊がアロア等の中で「騎士」と呼ぶに相応しい者等である事は確かだつた。それを確かにさせたものは彼等の大半が煌びやかな甲冑に身を包んでいると言つ事もあつたが、それ以上に1000人からなる隊の内馬上の者の割合が通常の隊より極端に多い事がその確信の根拠となつていた。アロア等とて馬は所有していた。だがその頭数は僅かに7頭である。しかも、戦力としての馬では無く、運搬を主な役割としている馬たちだ。よつて戦力として纏まつた物になりえないその馬達を、当然彼らは今日この戦場に連れて来てはいない。だが、眼下の大隊はその2割以上までもが騎馬なのだ。アロア達とは違う、戦力としての騎馬である。

「・・・理由は聞かせてもらえるんだよな?」

序章 そんな小さな想い、の物語（3）

朝靄がかかり始めたランタンと呼ばれる直径2・5ラス（1ラスは約1・2？）ほどの橿円形の草原はその北西から北東にかけてならかな川が横切る穏やかな地である。平地の真ん中に大樹が一つ立つのみのその光景は平穏な地そのものであったが、それはここに人の匂いがほとんどしないからなのかもしれない。南北に、大して整備もされていない獣道とも見紛う様な街道が一本走っているが、この様な地にはあるはずの人々の集落も農地もここにはなかつた。だが、それを不思議と感じるのは遠い地より突如としてこの地に舞い降りるかの様な奇特な経験ができた者だけかもしれない。

ランタンを挟んで街道の南北各25ラスほど進んだ地には人の里があつた。ランタンを、地を足で踏んで訪れようとする者は必ずその里のどちらかを通る事になる。そして、その地よりさらに北もしくは南に良く事無く引き返すことになるのだ。いや、もっと正確には、そもそもこの地域の者ならば里よりランタンを通つて先へ行こうとは里に来ずとも考えもしなかつたであろう。

ランタンを中心とされた地図があつたならば、地図を覗く視界をランタン一帯から徐々に離してみると、まず目に付くのはランタンの北側鬱蒼と茂る森が続く小高い丘だ。その昔、ここに葬つたと言われる者の名をから、【クエルランス】と言つ名がその地には付けられている。そして、そのクエルランスを北へ下つた場所に千数百人の群れが見える。一段には無数の軍旗が掲げられているが、旗には「聖・フィガロ」と刺繡されている。

更に視界を広げていく。南北に途切れ途切れに見える街道意外は森しか見えなくなつたが、しばらくすると北側に主規模の人の里が見えた。もししばらくすると南側にも里らしきものが確認できる。これが先ほどのランタンを挟んでもつとも【近所】となる人の生息地なのである。

そこから先には南北どちらにも人里が散見できるようになる。どうやら、ランタン一帯のみが人の無生息地帯として取り残されたようだ。

ランタンの北側を縦断していた川はその後大河と合流し、海洋へと流れ飛んでいる。

ここまで来ると人里も点となってしまい確認できるのは川と森と山、そして海洋だけとなってしまうため、ここで神のみが語れる視点はいつたん役割を置くことにする。

だが、この視点からもわかるように、ランタン・クエルラヌース一帯を空白地帯として南北に人里が分断されているのは、何もこの地に人を寄せ付けに魔境がある訳ではない。ましてや自然による影響などでもない。

そこに住む人、そのものが原因となっていた。

合わせて50ラス程も離れた地に住む人々はお互いほとんど会話を交わした事が無かつた。言葉が通じない訳では無い。この大陸ガドルムに住む者も外地に住む者も、人の使う言葉は单一なのだから。

ただ、彼らは掲げる神が違った。

そう、互いに言葉すら交わさない理由はただそれだけなのである。しかし自らの信じるモノを信じることが出来ない者達を、彼らは認めることが出来なかつた。自らが信じるもの以外を信じると云う事、それを許容することなど出来なかつた。

まだ見ぬ神は、見ることも触れる事もできる人の生より重いのだ。そして見えぬ神を否定する者は、互いにとつて「ヒト」では無いのである。

チュアーニ教の掲げる神「フィル＝グラウシェラ」を信じるフィガロ王国と、バウと言う、海を隔てた南西の大陸に勢力を誇る大部族の一派であり、その地域で信仰の熱い「シユエラ」神を崇めるイメラタ族では肩を組んでの平和など許容しようが無かつた。

相容れぬものは「神」だけなのだ。だが、それが互いの全てを相

容れぬものにしてしまっているのだ。彼らの掲げる「神」は自らを信じる者以外には救いの御手を伸ばさない程、小さな度量なのである。

その、互いに人では無い者同士の戦闘の地に今回選ばれたのが、ランタン・クエルラヌスなのである。

十数年前までは70ラス程北東の地が彼らの憎しみの地になつていたが、徐々に南西へ移動し、現在はこの地に互いの憎しみをぶつけていた。

そしてそう遠くない未来に、再び悲しみが、狂喜が、この地を覆うのだ。

序章 そんな小さな想い、の物語（4）

ムリエラのその声はさすがに重みを持つて吐かれた。

彼らを率いるものを信頼していないわけではない。だが、彼らとてその手に多くの者たちの生命に責任を持つ身なのだ。自らのアロアへの信頼を下の者たちにまで押し付けるほど、アロアの発言は無視できるものではなかつた。

「ああ。」

アロアにもそれはわかっている。

だが、彼らに不審がられる程の大胆さがここには求められた。

「時間がない。端的に話すぞ。」

カルツェル、ムリエラが同時に頷く。

「イメラタの軍は目の前の本体を中心に左右と前方に軍を展開している。本体の軍がおよそ1000、左が2000で右が1000、そして前方に張り出しているのがおよそ2000だ。合わせて、6000つてとこだな。前に話にあつたイメラタ全軍とほぼ同数だ。恐らく別働隊、伏兵はないと思う。左軍の方に厚みを持たせているのは、右側が広陵になっているためか、主戦場を左軍側と考えたからだろうな。ま、正攻法と言つたところだ。」

三人の中心の土面に小石を使って、アロアは敵軍の陣形を作つていつた。

「対してファイガ口側だが……。」

（本来、これはランファンの役割なんだがなあ。）

今はペイジュエ公の軍へ連絡役（指南役）として部隊からは離れている色白の男へと、心の中ではあるがちょっとした愚痴をこぼした。今アロアが話していることは、そのまま昨日、その色白の男がペイジュエ公の面前で話したことの繰り返しであった。

「王を中心とした本軍が約3000。前方へと張り出した軍が左

に1000、右に1000。」

先ほど置いた小石と微妙に色合いが異なる石が3つ並べられた。

「昨日までフィガロ軍がいたのはここ、クリアランスの丘だ。だが、今朝までに全軍はその丘を降りてイメラタ中央軍の全面へ出てきている。」

置いたばかりの3つの小石がすっと動かされた。

「待て。なんでフィガロは丘を降りたんだ。」

ムリエラから、その小石の動きを制する声が上がった。恐らく、最初にあつたアロアの「時間がない」の一言があつたためだろう。発言を控えようと努力をしていたみたいだが、この小石の動きには疑問を挟まずにはいられなかつたようだ。

まだ若い彼にも、広陵に陣を構える事の優位性は認識できたのだ。「イメラタの主力が左側へ集中しているからだそうだ。王は今回の戦いをイメラタへの決定打にしたと考えている。だからこそ、早い段階で主力同士の戦いで決着をつけたい。そのための敵主力前方への移動だ。」

「な……つ。」

そのムリエラの驚きの声も、そう遠くない過去で聞いた覚えがある。

アロア自身が、ペイジュエ公に対して吐いた響きだ。

「敵に合わせて軍を動かして、そして優位な地を捨てたのか？ 数で劣っているのにその様な事をして何の意味があるんだ？」

「・・・意味か。そうだな、・・・敵が丘を登つて来るのを待つてなどいられない。こちらから仕掛ける事で主導権を持つ。正面から敵を撃破してこそその戦い。主力同士の決着こそが聖戦にふさわしい。そんなところが意味じやないかな。」

ムリエラの疑問に対しても不真面目な答えはないのだろう。そして、ムリエラもあまりに不真面目な回答に一の句が告げられなかつた。

「王は信じているんだよ。今回の戦いの勝利を、神に祝福された

軍が負けるはずがないことを。そして、その軍が個々の力において蛮族に劣るわけがないことを。

繋がらない」の句の代わりにアロアが言葉をつないだ。

「うでも言わないと、アロア自身の氣も収まらないのだ。ペイジュ工公の眼前で晴らせなかつた鬱憤を、開戦の間際になつて心許せる仲間の前といえども吐いてしまうのは、まだアロアも若さゆえのものがあるのだろう。

だが、それはムリエラに「この句を吐かせる機会を作らせてしまつた。

「あのなあ・・・。」

そのため息にも似た嘆息には、鬱憤を吐かざる負えないアロアへの同情と、その状況を甘受せざる負えない自らの状況への嘆きが見て取れた。

「イメラタが蛮族か何かは知らないが、一対一なら勝てる可能性は半分だし、一一対一なら可能性はほとんどなくなる。喧嘩は相手が蛮族だろうと、神の祝福があるうと法則に変更は無いんだぞ。」

「王ほど高貴な方だと、喧嘩のよけつな、蛮族のするものはされた事がないんだろうさ。」

せめて嫌味の一つを言いたくなるのも若さのせいだろうか。

「・・・まあ、もういいさ。どちらにしても今更どうじよづもないのだろう。話を進めてくれ。」

どうもこのムリエラは、アロアよりは若さゆえの愚痴は長く続かないみたいだった。

それでも、アロアの表情からこの手の鬱憤が自分よりも多大に、眼前の者の身の内に溜まつてこることを語った事からの配慮だったのか

「ああ、すまないな。」

さすがにアロアも、これ以上愚痴に時間を費やしたくはなかつた。

「ムリエラの言つとおり、数の上で言えばイメラタの優位が残つたまま、今の陣形ではこちらに地理的優位は無くなつたことになる。

」

アロアの手がイメラタを想定した小石の一つに触れた。

「やうに、イメラタはこの右軍、1000を遊軍として使える状況になった。」

その小石がゆっくりと前進する。

「恐らく、この軍はそのまま前進するだろつ。 フィガロが去つた、このクリアランスの丘に。」

小石の前進が止まつた。

それを見るムリエラの表情が険しくなる。アロアにも彼の表情の変化はわかつた。

「そう、ムリエラが想像する通りだ。これでイメラタは数の優位性に続いて、地理的優位性も持つことになる。」

止まつた小石がまた動き出した。

「そして、この丘の上にたどり着いた軍はそこから丘を駆け下りるだろう。主力同士がぶつかり合つ、フィガロ本体の左わき腹に・。」

・。

小石が色の異なる石にコツンとぶつかつた。その様を男たちは静かに見守つた。

「この戦は、負けか。」

半分ため息交じりにムリエラがつぶやいた。

「ああ。このままだと決定的打撃を受けるのは、イメラタではなくフィガロになるだろうな。」

「イメラタの右軍が来るまでに決着をつけてしまふ事は難しいか？」

もう頭では分かつているのだろうが、ムリエラは聞けずにはいられないと言つた感で声を発した。

「そうだな。数ではフィガロが5000、イメラタが4000での前線の戦いだ。しばらく有利に進むのは確かだろうな。」

はたしてこれと同じ議論が王の御前ではなされなかつたのである。

うか。

『聖戦』と言つ言葉はそれほどまでに将達の判断を鈍らせてしまふのか。それとも王の御前と言つるのは誰もがもの言えぬ木偶となつ

てしまう空間なのか。

「だが、その差はイメラタを瞬時に壊滅させられるほどどの差じやない。それに、フィガロ全軍を指揮するのは王自らだ。」

「王が自らか？」

もう何度目だろうか。ムリエラの表情に、数ルム前の自分の表情を重ねてしまふのは、あの時対面していいたペイジュ工公は、どのような思いでアロアの表情を見ていたのだろう。

「ああ、軍議でそうなつたそうだ。だが、王が戦術と指揮に長けているとは聞いたことが無い。聖戦と言う事で出張つてしまつたのだろう。まあ結局は、逆に大した命も下せず、判断できず、前線を混乱させるだけなんだろう、な。」

敵も族長が出てきているのだ、王自ら出ないで軍の士気など保てるものか。もし、フィガロ王に寄つた見方をするのならばこう抗弁するのかもしない。だが、あの王に、弁護されるだけの資格と能力を有しているとはアロアにはどうしても感じられなかつた。

「だから、下手をするといメラタは右軍の投入が無くとも逆に優位に戦いを進めてしまうかもしれない。」

「その上敵軍にわき腹を突かれてしまつか・・・。」

昨日同様の説明をしたモース公も、結局はフィガロ王に何の進言もしなかつたのだ。フィガロ本体の動きは、その予測できるであろうイメラタの動きに対し、何の対抗手段もうつていなかつた。

「どうすんだ、アロア。」

視線は厳しくまま、ムリエラはアロアへ言葉を投げた。

だが、ムリエラの声色は途方に暮れてはいなかつた。

それは、この状況を認識した上で軍を動かした団長への理解であり、信頼からであらう。

そして、アロアもまだ状況に絶望はしていなかつた。

「勝たせるさ。フィガロを、な。」

口端が少し上がつた表情を連想させるような、答えた。

多分に高慢ともとれるほどの自信が、その言にはあつた。

「フィガロ全軍の100分の1程でしかない軍の指揮官に過ぎない者が、軍全体の運命が自らの手の内にあるかのような言を発するのだ。高慢以外の何者であろうか。

その、高慢なる者の右手が動いた。

「俺たちが初め、王に命じられた配置はここだ。」

フィガロを示す小石の中で一番大きな一つを指差した。

「軍主力の左側だ。まあ予想通りに行けば最初に攻撃を受け、壊滅か、運が良くて王を逃がすための捨て石になる運命、の配置だな。」

アロアの指が小石をコツコツと叩いた。

「だが、こんなところで捨て石になる気はない。しかし、捨て石にならない方法と言うと敵前逃亡しかない。」

「・・・それは難しいだろう。」

ムリエラもその小石をじっと見つめる。

「ああ。主力の軍において敵前逃亡 자체が上手くいくとは思えないし、何よりも敵前逃亡しては、雇われ部隊としての俺たちの今後の運命は潰える。」

それだけは避けなければならない。彼らが彼らの『一団』にかける思いは、敵前逃亡のような小事で終わらせられるほど軽くは無いのだから。

「とすると?」

少しせかせるムリエラの声。

「前提を覆すしかない。この戦に勝てば捨て石は元より、敵前逃亡もしなくても良くなる。」

小石を叩く指が止まった。

「それはそうだが、その方法は?」

恐らくムリエラの気が短いのではないのだろう。例え誰であろうとも、自らの運命を決するものに対しては、判明までの時間限りなく零にしたいものだ。

「敵に学ぶんだよ。」

アロアの指が小石を叩いた。指で小突いていた石では無く、先ほどその石の脇まで移動させた、イメラタの別働隊を模した石だ。

「俺たちもイメラタ本体の脇を突く。」

いつの間に手の内にしていたのであらう、今までのより更に小さい石がフィガロ本体を模した石の脇に置かれた。そして、素早く反時計回りに前進し、イメラタ本体の石にあたつた。

「それが今の俺たちか。」

「そうだ。」

ムリエラの言葉に、アロアが頷いた。

「だが・・・」

しかし、それを受けて出たムリエラの言葉は否定と疑問を表すものだった。

「かなり数の力が足りなさすぎるんじゃないか。俺たちは50人程の戦力しかないんだぞ。目標のイメラタ本体は1000。この戦力差は厳しいと思うが。」

最もな分析である。そして、その最もな分析は更に補足した。

「敵に学ぶと言つたが、イメラタの遊軍は、1000でフィガロ本体の3000を強襲すると言つものだらう。相手の3分の1だからこそ効果があるのだろうが。それが20分の1だと効果らしきものがあるとは思えないぞ。」

そう、先ほどムリエラが言つた喧嘩の法則はフィガロ・イメラタに限つて適用されるものではない。彼らもその対象なのだ。

しかも、これが20倍の敵相手となると、さすがに個々の能力差では到底埋められるものではない。

「そうだな。確かに俺たちがこのまま敵本体へ突入しても、効果の範囲は限られるだろう。だが、それは正攻法で行つた場合だ。相手の機をつけ、上手く立ち回れさえすれば、例え20分の1であつても、一瞬の衝撃を与えるならば俺たちでも可能だ。」

「・・・可能か?」

「ああ。今のところ俺たちの動きはイメラタには伝わってはいな

いだろう。本体が大きな動きをあからさまにしてくれているのが、ここでは良い隠れ蓑になつてゐる。」

少し皮肉が込められていた。いや、わざと込めたものだらうが。

「そう、王の判断が逆にこの策を可能にしたって事だな。」

昨日の夜に行われた本体の移動の間に、アロア達の隊は本体から4ラスほど離れた地へと移動していた。そして、朝もやの僅かな光を手掛かりに、イメラタ本隊が見下ろせるこの地へやつてきたのである。

刻一刻と変わつていく状況、それにどう対応するかで戦の勝敗はどうちらにも転ぶものなのだろう。アロアが出来うる事はここまでが限界であつたが、もしこの戦場全体を把握できる情報を持ち、それを効果的に動かせる権限を持てたのなら、どのような指揮がとれたのだろう。まだ、アロアには単独で指揮した経験も権限もなかつたが、この足枷が多い戦場の中でそれを夢想してしまふ事は仕方のないことであろう。

ふと、アロアは今の空間がアロアとムリエラの一人だけのものになつてゐる事に気が付いた。この会話には3人が参加してはいたはずだか、いつの間にかアロアとムリエラは一人向き合つ形で話を進めてしまつた。

そう思い、一息入れた話の合間に視線を三人目の男がいた場所に振つてみると、確かにその者はそこにいた。あまりに話に入つてこないため、不在の可能性も頭をよぎつてしまつたが、さすがに戦闘直前のこの時にのんびり散歩などではなかつたようだ。

では、アロアとムリエラの話を遮らないよう気を使つていたのかと思ったが、それがあまりに的外れなのは一目でわかつた。

「・・・カルツェル、まだお昼寝には早いと思うんだがな。
つぶやくアロア。

「起きろ、カルツェル。」

そのつぶやきでカルツェルの不遜に気付かされ、先ほどまで自軍に模していた石を投げるムリエラ。

「痛い。」

言葉ではなく、痛みで起きたカルツェル。

「なんだ、もう敵と当たる頃か。」

なんだかこの場に合っているのかいないのか、意味不明な返答が返ってきた。

「ふう。」

今度は一人同時に吐かれた、声になるため息。

「ああ。当たったよ。今、お前の頭にな。」

もう仕方がない気持ちを顔一面に出したまま、なんとか返答するアロア。

(信頼されていると・・・やう思おう。)

仲間への極端な性善説の採用。

(これが団長としての役割の一つかんだり、な。)

この大男と付き合つと、考えさせられることが多くなる、そして、その分だけアロアの長としての気苦労と、ため息癖が増えていくのだ。

序章 そんな小さな想い、の物語（5）

「行くぞ。」

声が上がった。

「おうつ。」

それに呼応して無数の声が上がる。できるだけ、声も動作も大きさに。それがこの作戦の第一の指令だった。

アロア達が現在の地に到着してまだそれほど時は経っていない。すでに戦いは始まっていた。遠く北の方向で開戦を知らせる銅鑼の音がしたのは、もう半ルーム程前の事である。銅鑼の音色から戦いはフィガロから仕掛けたようだ。

あの王の事だ、はやる気持ちを抑えられず自ら出撃の合図をしたのだろう。他人を死地に追いやる命令と言つのはこつもたやすく出せるものなのだろうな。そして、それが自らの関わることではない事を認識していたなら益々容易になる。恐らくは今頃戦勝の報告のみを期待して後方で、先ほどのカルツェルよろしく眠気と戦っているのではないか。

（その戦いこそが、王たる者の戦いなのかもな・・・。）
嫌味ではあつたが、そう自らを納得させた。

だが、その王の決断は、アロアが立てた作戦には功を奏した。

思つたよりも早い開戦により、アロア達も出撃のタイミングを前倒しにしなければならなかつたが、そのおかげでまだ晴れきらない朝靄が彼らの姿を多少なりとも隠してくれた。

イメラタ本隊の右後方より見慣れぬ軍隊が突然姿を現した。

それは、本隊後方に位置したほとんどの者が認識できるものだつた。なにしろ、突然の雄叫びが上がつたのである。誰もがそちらに目をやる。

考えた通りの効果だつた、まず敵全体の注意をこちらへ向けるの

だ。

それには成功したと言えるだろう。アロア達が敵前面へと出たときには、こちらへ目をやつていらない者はほとんどいなかつたのだ。どの敵兵とも目を合わすことが出来たのだ。

(有名になるとこんな感覚を味わえるんだろうかな?)

走り出しながら、そんな事を考える自分を変わり者だと感じる事もある。だが、周りの仲間を見渡せば、いかに自分が普通の人間かを身につつませられる気もする。本当にこの仲間といふ空間は貴重なものだ。

だからこそ、こんなところで終わらせるわけにはいかない。

「ドカツ」

何かが大きくぶつかる様な音がする。

軍と軍がぶつかるのだ。互いに必死に駆けて行く先の衝突になると、その衝撃だけで人を死に落とすのは簡単なものだつた。

だが、今回の音は通常起こるはずのそれとは違つた。

アロア達と最初の接触となつた、十数騎の騎士とそれを支える馬たちが雪崩の如く倒れていつた音である。

そして、それを起こしたのは先ほどまでは睡魔と闘い今度はイメラタ族と闘う事となつた、闘い続きのカルツェルであつた。まずは馬を狙え。

これが第一の指令。

たとえ顔と視線はアロア達へ向けられても、騎乗の者たちがすぐに馬と共に方向展開を出来はしない。だからこそまずは馬を狙つた。

そしてその役割をカルツェルに託した。

一人だからこそ虚を付く攻撃もできた。大勢が息を合わせると、どこかに遅れが出る。

とは言え、一人でそれを成せるのはカルツェルだからこそだつた。凄まじい、の一言に尽きる彼の剣だった。数秒だったかを数える暇もないほどの瞬間と剣を振る速さ、それに斬ると同時になぎ倒す

効果も同時に出了した劍力。それがおよそ常人には難しいことは、曰にした者を即座に理解させられた。

だが、この指令は他にも多数の効果を狙つたものだつた。

第二の効果。それは騎馬が崩れ落ちるというものは、遠くからでも確認できるほど派手なものだつた。先ほどアロア達の発生に後ろを向いた、無数の視界の中で騎馬が崩れ落ちたのは戦果を実態以上に相手に印象付けられた。

イメラタ軍のあちこちで「敵襲」「方向転換」などの急を要する命が飛び交つてゐる。

敵軍にこちらの奇襲へ目を向けさせる。アロアにとつての最初の目的はこれで達せられた。

しかし、実際にアロア達の攻撃を受け止めた部隊は違う印象を受けたであらう。

はでなカルツェルの攻撃に面食らつたものの、その興奮から覚めてみると目の前には僅か50人程度の小部隊。更には倒されたはずの騎士達も次々に起き上がりてくる。

馬を除けば損害はほぼ無いのである。

その無傷のイメラタ本隊に対するのは僅か50人の、そこらの山賊と見間違える程度の小部隊。相手の正気を疑う程の戦力差である。本隊の一部でもひと揉みにできるのは明らかだつた。

一瞬の驚きが激しかつた反動からなのだろうか、それに気付いたイメラタ後方部隊の反撃に対する気持ちは重かつた。

「潰せ」「殲滅しろ」

先ほどの驚きからの命とは打つて変わって、強気が前面に出た命が複数上がつた。

気持ち一步後ろに引いていた兵達の、剣を握る手に力が入つた。

彼らの隊長たちの命が無くとも飛び出す姿勢である。

だが、彼らがその最初の一歩を踏み出そうとしたとき、別のことから命が下つた。

「退却。」

その命の主は彼らの隊長ではない。

彼らへと無謀な突入をした小隊の中から出た声だ。

最初の一歩を踏み出し損ねた彼らの前で、その小さな隊は小さいが故の長所を生かすかのように綺麗に回れ右をすると、来た方向と同じ場所を目指けて走り出した。

機を逸らされた、正に「あ」と言う間もない逃走劇。だが、彼らの隊長も腑抜けで隊長の座に就いたわけではない。無謀なる小隊に一息遅れはしたが、すぐに彼らの部下に追撃を命じた。

アロアの先ほどの作戦の、第三の効果が表れたのはここでだった。本来追撃で最も力を発するのは騎馬隊である。だが、先ほどの接触の際にイメラタ本隊でアロア達を追撃する位置にいた騎馬は、あらかた大男によつてなぎ倒されてしまった。イメラタの本隊といえども、その中枢以外で騎乗のものはそつ多く配置されてはいない。更には騎乗の者はそれ自体が身分の高さの証である。つまり騎士階級なのだ。そして、イメラタ軍の構成は（イメラタのみでは無くフィガロも、この大陸のほとんどでそうなのだが）身分の高い騎士が歩兵数人を指揮する隊長の役割を担つてゐる。

いくら歩兵と周りの隊長たちに追撃の意志が強くても、実際に追撃すべき歩兵の直接の指揮官がやつと起き上がりかけている状況では、十分な指揮はできず自然追撃も緩慢になつてしまつ。

結果、一瞬の喧騒が収まつたその戦場では、十数頭の倒れた馬と地面に叩きつけられた箇所を痛がる騎士たち、それに奇襲に対する印象が残るだけとなつた。

また、遠く北の方で戦闘の声が聞こえる静かな空間と時間が流れた。

急激な衝撃の後に訪れたこの時間の中で、イメラタ本隊の兵達は今、あまりに意味不明な急襲について考える時間を持つことが出来てきました。

序章 そんな小さな想い、の物語（6）

「恐らく、イメラタの騎士たちはこいつ考えるんじやないでしょ？
か。」

色白の男はそうアロアに語った。

「なんだ、逃げ出したのか、と。」

男の口元がわずかにほころぶのがアロアには見て取れた。この者は自らの策がはある可能性を見出した時、笑みが湧き出す。だが、大抵その表情が浮かび上がりそうな場合は戦の中となつてしまつため、一応礼儀として笑いは堪えるのだそうだ。

だったらその口元のほころびも堪えて欲しい、とアロアは思うのだが、その表情が見えた時はアロアにとつても吉兆であるため、そう目くじらも立てられない。

「それは当然湧き上がる思いでしょ？ 何と言つても僅か50人での突撃です。普通では考えられない。」

（その考えられない事を作戦とは言え、俺たちにさせよつとしているんだけどな。）

と、アロアは心で思つておくことにした。

「だからこそ考えるのです。多分奴らは自らの力を過信したが、イメラタ本隊の大きさも知らずに突撃してきた愚か者だと。」

「うん」と男は彼の考えに納得するそぶりを繰り返した。

「なんと言つてもイメラタにとつては私たちこそ蛮族です。元来蛮族とは愚かなものです。ならばそれに見合つた行動をしてあげましょう。人は自らの見たいものを見、思いたいものを思うのです。（少し哲学的な物言いだな。隣のミリイがあぐびをかいだぞ。）

と、これも告げ口はしない事にした。

「愚か者で片づけられる。実に不名誉な事ではあります、これは次の行動のためには實に有益な事になります。」

(そろそろ考えがまとまつた頃かな。)

しばし時間を置いたアロアはそう語られた事を思い出し、落としていた腰を再び持ち上げた。

「んじゃ、また行くぞ。」

その声に男たちはやれやれと言いはしなかつたが、行動にそれを全く隠そうとはしていなかつた。

アロアはそんな彼らが好きなのである。例え戦場の中であらうとも人としての感情を豊かに表す彼らが。まだ若いのだ。何かを隠す術など、今はアロアに押し付けておけばいいのだ。

「そんな顔をするな。今度は本番だぞ。」

だが、長としては言わねばならない時もある。

「心配するなアロア。みんなわかってるさ。」

そう言つて、彼らが長の肩をムリエラが叩いた。

「ああ。」

答えるアロアの剣が抜かれた。そして、前方へと振られた。

今度は先ほどの様な掛け声は上がらなかつた。

「二度目の突撃は一度目ほどの騒々しさはいらないです。敵への印象付けは一度で十分。また来たかと片目で見てもらう程度でいいのです。」

再びイメラタ本隊の右後方へ出た彼らだが、さすがに先ほどの奇襲のように驚きをもつては迎えられなかつた。いや、逆に両軍がぶつかるまでに、こちらへ向かつて備えをとつて迎えられた。しかし、色白の男の言った通りだつた。アロア達へ構えを取つたのは一部、100人程度であつた。他の者たちは顔だけを右後方へ向け体はそのままか、それとも耳だけをこちらに向けているだけだつた。再び突撃を行うアロア達を

「愚か者だと思っていたが、ここまで愚か者だと思わなかつた。

と、もう私達への評価は完全に地に落ちました。」

と、言つ思ひで迎えたのだろう。

それは備えに出た数だけでなく、その対応にも見て取れた。

通常戦闘の前には敵戦力をできるだけ削ぐために、両軍がぶつかる前の段階で弓による攻撃が行われるのだ。前の突撃は奇襲だったため、それが無かつただけである。

だが、評価を地に落とした者たちへ弓で迎えるのは非礼と思つてくれたのか、イメラタは常套であるその行為を怠つたのである。さすがにこれは色白の男も予測できなかつた副産物である。

逆に今度のアロアの攻撃は先ほどとは違つた。

「弓隊、打て。」

聞きなれた声が上がつた。

50を大きく超える本数の矢が空へ舞いあがつたとき、今回は見られなかつた驚きの表情をイメラタ軍に見て取ることが出来た。

「これがイメラタにとつての最初の驚きになります。」

完全に教師の体である。アロア達に対しだけではなく、貴族であるペイジュエ公の前においても、この男の口調に変化はなかつた。

「この弓隊のタイミングについては、私たちの隊と機を合わせなければなりません。大変恐れ多いのですが、この弓隊の指揮については我が軍のラターファに取させていただいて宜しいでしょうか。」

「・・・う、うむ。」

この教師口調の前に、ペイジュエ公も気持ちが押されていくようだ。

「恐れ入ります。しかし、彼らにとつて驚きはこれだけでは終わりません。これから驚愕のみが唯一の感情になつてもらうのですから。」

ちよつと言い過ぎの感がある男の指が一本上がつた。

「一度田の驚愕はそのすぐ後に起こります。」

序章 そんな小さな想い、の物語（7）

「隊による驚愕の中、半数は戦闘不能になり半数は混乱の中にいるアロア達に対した軍は、容易に本体内への敵軍侵入を許してしまった。

「今です。」

戦場でも同じ口調を発する男の声が上がった。

そして、それに促された声が、少々緊張を帯びながらも宿高く上がつた。

「・・・、展開せよ。」

だが、よく通る声だった。

「展開だ。」

「左に展開せよ。」

「右方の敵に備えるのよ。」

それに応えるかのように、各所で隊長たちの声が上がった。

一塊で動いていた軍がいくつかへ分散していった。しかも、数人での分散ではない。各自30～50人程度の規模を持った隊での分散だった。

敵本隊旗までは、まだ300レス。

「そう、これが二度目の驚愕となります。」

色白教師の講義はなおも続く。

「一度目の突撃から撤退へと続いた時に打った布石は、この時に最大の効力を發揮します。一度目の突撃の折が50人程度の部隊だったため、二度目も同様と勘違いを起こします。」

誰へ向かつてか、少し首を左右へ振った。

「本来なら良く注意を払えば、そう簡単に、気付かないなどと言ふ間抜けな事態は発生しません。ですが、我らの事を間抜けと侮つ

た敵は、今度は自らが間抜けな事をするのです。感覚による認識を、実際の目で見る認識より優先させてしまうのです。」

その時は、そう上手く物事が進むのかと思ったが、なるほど、敵の驚愕のさまを見る限り当たつている。

「それは驚愕もするでしょう。ちょこまかとこ五月蠅い部隊が、分散すると言う愚をまたしても犯した。それなのに、分散したはずの各隊の人数が大して減っていないのですから。」

確かにアロアラの隊は50人そこそこの数であり、その数の制約はどうにも短期間では変えられないものである。だが、ここにはアロア以上の力を持つた者、貴族がいる。

「ペイジュ工公の率いられる軍は200人以上の規模を誇ります。我らと合わせた場合、一回目の突撃の5倍を優に超える戦闘力となります。」

しつかりと今回の作戦のパトロンを持ち上げる所は、一介の教師ではない面も見せつける。

5倍以上の戦闘力は明らかにお世辞であろう。貴族に率いられ、安全な地を渡り歩いてきたであろう軍に対し、各地の戦場のしかも最前線を経験してきたアロア達の軍が劣っているとは、どう覇廻日に見ても難しかつた。むしろ、1000対50ではさすがに勝ち目は無いが、ペイジュ工公の率いる200人が相手であればアロア達は負ける気がしなかつた。

だが、この時点においては戦闘力の必要性はそう高くは無いのである。敵を混乱させる軍の規模こそが必要なのであつた。

そして、ペイジュ工公の軍にはその規模の他にもう一つの魅力があつた。

「ぐわあーん」

銅鑼の音が突如として混乱する、イメラタ本隊の後方で鳴り響い

た。しかも一つではない、複数、いや十数の銅鑼が一斉に叩かれたのである。

耳を引き裂かんばかりの音だった。

(これは堪らんな)

暴風のようなその響きに、ムリエラもしかめる表情を作らざるおえなかつた。

(知つても驚いちゃうよなあ。知らなかつたら……)
と、その不幸にも知らない者たちへ田をやつた。

(この男には演技力と言う才能もあるのだろうか。)

まだ見ぬ敵兵への同情に満ちた顔を、その男は見事に演じていた。「そう、ここで突然の銅鑼の音。予想もしないものを耳元で、しかも大音量で聞かせられた人はどう思うでしょうか。恐らく思うことすら難しい程に混乱してしまうでしょう。可哀想な事です。」

本当に同情しているのか、そこまでは見抜けないのだが。

「これが第三の驚愕です。そして、これにより一つの道が開かれます。」

ピンと二つの指を立てて見せた。すでに田も落ちた空の下では、隣を歩くアロアにしか見えないのだが、彼にはそれで十分なのだろう。

その指が一本だけたたまれた。

「一つ田はイメラタ本隊後方の、私たちに対していた者たちの動きを、一瞬でも止める事です。私も、銅鑼の音は何度聞いてもうるさくて敵いません。この二度田の驚愕を至近距離で受けたのなら、彼らの動きにある程度の影響を与えるのを予想するのは難しくありません。」

「そうだな。」

軍に籍を置いたことがあるものなら誰でも知つているだろう、その音量を想像し、アロアも確かに頷いた。

「一つ田の効果ですが、それは今まで後方部隊しか払つていなか

つたであらう私たちに對する注意を、イメラタ本隊の中核まで広げる事です。」

再び上げられた、一本の指を遊ぶかのよつて動かしながら話は続いた。

「これは別に今まで軽く見られ、無視された事に對する子供じみた抵抗ではありませんよ。」

しかたなくアロアは頷いた。

何故この男は、同じ話を聞くのが三度目になつているアロアに對して、確認の意志を取るかのよつた語尾をつなげるのだろう。それ程までに、この教師にはアロアが理解力のない教え子に見えるのだろうか。

「先ほどまで驚愕の蚊帳の外だつた中枢の者たちは、ここでやつと仲間入りしてくれます。ですが、この驚きはすぐ耳元で銅鑼を鳴らされた者たちほどの驚愕ではなりません。『なんだ?』と言つ程度のものです。ですが、それで良いのです。振り向いて後方の出来事に注意を持つてくれることに意味があるので。」

やつと上げた一本の指を男は引っ込んだ。その行為が夜の空氣の中では、寒さを指に強いている事に気付いたのだろうか。

「音には驚かなつた彼らですが、振り向いた先で起こつてている事には驚くに違ひありません。何しろ少し前に逃げ出したか弱き敵軍が、今度は数倍になつて自らの軍の後方を混乱させているのですから。そして、彼らはその後方の混乱する軍の中にいる敵軍に対して、攻撃なり防御なりの構えを取るでしょう。」

講義にわずかに熱が加わつた。

「ですが、ここが好機になります。」

序章 そんな小さな想い、の物語（8）

そう、「時」はここだった。

イメラタ本隊の注意が銅鑼の音がなる箇所に集中した時、次々と敵がアロア達の主力がいるであろう場所に対して備えを取つていつた時、だがアロア達の主戦場はそこではなかつた。

その「時」アロアを含む30数名はイメラタ本隊の更に奥にいた。ペイジュエ公の部隊を中心とした襲撃隊から離れる事、90レスほどイメラタ本隊中枢へ近付いた場所へアロア達は進出していた。いや、そのアロア達の進出を待つての銅鑼の音だつた。

だが、その音は本来注意が向くと思われる、敵本隊中心へ突出したアロア達への部隊から、いまだ最初の突入地点で激しい動きを繰り返す部隊へと意識を持つて行つてしまつた。

この瞬間こそ好機であつた。

弓、戦力の増加、銅鑼によりもたらされた一瞬の、好機と言づ名の「時」。

その派手な演出の中、息を潜めるかの様に進出していた部隊。だが、何よりも多くを持った部隊。

もう、あれこれ考える必要はない。

後は突き進むだけでいいのだ。最早残りわずかとなつた先にいる敵中枢へと向けて。

そして、何も考えない事であれば誰よりも力の発する男の一撃が彼らの最後の戦端を開いた。

また大音が鳴り響く。

だが、今度は銅鑼を鳴らしてのものではない。
また人が崩れ落ちていく。

今度は馬だけを狙つたものではない。
明らかに人の運動能力の激退を狙つた斬撃が男から放たれる。
次々と敵兵が崩れていく。

そして今回はその大男一人だけではない。他の30名以上の戦士たちが彼に劣らない勢いで敵をなぎ倒していく。

元来力を大人しく内に秘めているのが得意な者達ではないのだ。ここまで色白男の立てた作戦の元、か弱き愚か者を演じていたが、その枷がようやく外れた。今、彼らに与えられた指令はただ一つだった。先に見える赤色の大旗を目指して進むこと。それ以外は考えずとも良いのだ。

イメラタにとっての不幸は、この時初めて自らの奥深くまで食い込んできた者達の強さに気付いたことであつた。

大音量により注意を持つていかされた直後に起こつた、また別の場所での衝撃。戦闘中の極度に高まつた集中力を短い時間の中で振り回されたのである。その波打たれた思考では、目の前の衝撃を正確に処理しきれないのは明白であった。

いや、彼らが正常な思考を持てないようにするための数々の布石であり、その思考を狂乱へと追い落とすための更なる衝撃なのだ。全てが手の中で踊つっていた。

戦士たちの攻撃開始から数十秒と要しない内に、彼らの周りに戦力の空白地帯が生まれたのである。本来イメラタ軍とアロア達の軍による戦力のまだら地帯が、30名強の戦士たちの周りだけイメラタ軍の色彩が消えたのだ。

そう彼らは一人一殺では無く、一人当たり数人のイメラタ兵をそこから消し去つたのである。しかもあまりの短時間で。

その片方の配色が一瞬で消えてしまつた光景、自らが所属する戦力の陥没をして初めてイメラタは身の内に入つた毒性の巨大さを認識したのだった。

イメラタが認識を改めた時、敵本隊旗まで150レス。

再びイメラタ本隊中枢より声が複数あがつた。

それは敵を迎撃つとの先ほどの命とさほど変わらないものだつたが、対象が変わつた。先ほどまで本隊旗から250レスは先にいた

小さき者達が対象であった。だが、今度はその対象はその半分程度の距離にいる者達だ。しかも、それは「小さき」と形容するのを躊躇させるほどの力を有しているのは五感で理解できてしまう。

その一斉にあがつた指令は、イメラタ兵たちに身中の虫達に対して、それらを揉みつぶそうかと言ひ態勢を取らせるものだった。まだ虫達と彼らが王までの距離はある。それはどんなに足の長い者であつても一息にはたどり着けないものだ。最後の一息の距離へとたどり着くまでに彼らを押し潰せば良いのだ。いかに虫達が猛毒を持つていたとしても、数が違うのだ。そして数から来る圧力はその放つ猛毒さえ抑え込むことが出来るはずだった。

しかし、ここに至つてもイメラタは色白男の手の上からは降りられなかつたようである。

敵を圧するための数の力を一点に集めるべく発せられた命令だった。だがその命令は複数あがつたのである。

身中の虫たちと彼らが王との距離はわずかである。その小範囲の兵たちの行動を律するのに複数の命令は必要なかつた。一つの命の元、5～10人規模の複数の小隊が動けば事足りたのである。そして、ここには一つの命を発する力を有する者は不足しないのだ。他の支隊ならいざ知らず、ここはイメラタ本隊なのだから。

その条件の下であるにも関わらず、この狭い空間で命令は複数あがつてしまつた。

しかも、本隊に複数いる命を発することのできる有資格者達がそれぞれ発した訳では無い。本来ならその彼らの命の元、行動を起こさねばならないはずの小隊長達からそれは発せられたのだ。

何も彼ら小隊長達は上官に対して反抗した訳では無い。上官を無視した訳では無い。

ただ、待てなかつたのだ。

目の前で一瞬にして友軍戦力が消えてしまつた光景を作り出されたのだ。

その光景が、次は自らが立つ地で起こらないとの保証を誰がしていく

れるだらうか。自らの身を守るのは最後には自身なのだ。

色白男の言つ通り、驚愕がイメラタの中でただ一つの感情となり、それから来る行為が全てを圧倒していた。

複数あがつた命令、だがそれはあまりに多すぎた指令と、発した者が命を発するにはあまりに無資格者であつた事から、力を発する事無く霧散するのだった。個別の命令は命の下つた個別の者たちに対してのみ力を発するのだ。

全てを統一してこその数による圧力。
最早それを行使するのは不可能となつた。

複数あがつた命令の内、最もイメラタ本隊旗の傍であがつたものがあつた。

そしてそれは命令達の中で最も多くの者たちを動かした。そう、イメラタ王直下の部隊である。もつとも、命を与えたのは王自身では無く、彼に侍る長身の男からだつたが。

「全軍、右後方の敵に備えよ。」

100人程のその部隊は命の元、彼らへ向かつてくる敵意の塊へと構えを取つていく。

「王。」

その長身の男は命を発した大声から一転し、今度は静かな声でその傍らの者へ言葉を発した。

「間もなくここも戦場となります。敵は我らが防ぎますが、万が一の事もあります。御座を騒がせてしまい申し開きもございませんが、一時、王はこの場を離れていただけますようお願いいいたします。」

静かな声ではあつたが、それには若干の圧力が滲んでいた。

「わかった。そなたの申す通りにしよう。」

返答の声は素直だつた。何より若かつた。

「は。ありがたき幸せ。」

その言葉と同時に長身の男は身を前に折り曲げたが、それでも彼が侍る者よりその身が低くはならなかつた。

「カリファ。死んではならないぞ。」

若き声が、それでも見上げる位置まで下ってきた耳にかけられた。

「は。」

短い返答だった。開戦より離れなかつた男の影が、その場より遠ざかつて行つた。

その、長身の男の命による構えがよひやく陣としてまとまりれよつとした時、そこが最前線となつた。本隊旗まで残り70レス。

序章 そんな小さな想い、の物語（9）

緩慢なイメラタの反撃をおかげもあり、80レス程の距離をアロア達はそれほど時間もかけず進むことができた。彼らが前方の敵以外をほとんど無視したため、前方一点へ攻撃を集中できた事も功を奏した。

複数の命をあげた小隊長達は結果的にその緩慢な行動のおかげで自らの命をつなぐことが出来たのだ。もちろんアロア達は、小隊長達の安堵の思いにまで気を配つてはいなかつたが。

そして本隊旗がもう手の届くところまで来た時、初めてアロア達の進軍速度が急速に落ちる事になつた。

「やっぱりそう簡単には行かせてくれないな。」

ムリエラの声が舌打ちと共にアロアの耳に届いた。

「楽して勝てるとは思つて無い。」

初めてであるひ、アロア達がこの戦で陣と言える陣と対峙したのは、その陣を作るのはおよそ100のイメラタ兵。しかもそのほとんどが陽の光に輝く銀色の鎧で全身を包んでいる。

「重装兵か。」

恐らくアロア達の中で一人として身に着けていないであろう、銀色の鎧に頭の先から足の先までおおわれた兵の部隊だ。一目にてその重厚さはわかつた。

しかも彼らは100人程度とは言え、陣を張っているのだ。色白男の作り出した舞台から降りてしているのはすぐにわかつた。

「構える。」

その声はアロア達まで届いた。

声の先に目をやると、なるほど実際に命を下すには都合の良い長身の男が見て取れた。彼の表情にアロア達が作り出した驚愕への恐れはなかった。恐らく王直属の部隊であるひ、この重装備の兵達を指揮するのに相応しい立ち振る舞いである。

それはアロア達の予測から外れた事ではなかつたが、やはり自らが苦しむとの予測は外れて欲しいものだ。だが、ここまで計画通り進んできたのだ。苦痛を強いる予想のみ外れてもう一つと言つのはさすがに都合が良すぎるのだろう。

多少の不満はあるが、最後まで色白男の作戦は当たつたのであつた。そう、そして色白男の作戦はここまでであつた。

「戦術における作戦などと言つものは所詮、いかに最後の攻撃時に優位な体制を築けるか、と言うものです。最後の最後、全てを決める一撃を放つのはその場にいる者達です。作戦立案者ではないのです。ですから、私のここでの役割はここまでです。」

最後の部分は少し声色が落ちていた。やはり、この男でも自らの力が全てに及ばないことを知つてゐるのだろう。自らを無力だと感じているのではない、ただ限界がわかるだけに割り切れぬものがあるのだろう。

「作戦は机上で行われますが、その最後の部分に関しては机上ではわからない事が必ず起こります。敵首領まで残り100レスあまりでしょう。その場に作戦などと言つものは持ち込まない方が良いのです。その戦場の空気で決めなければならない距離なので此から。だからこそ彼も机上の者で終わろうとはせず、今も仲間と戦場にいるのだろう。」

「ですが・・・」

とは言え、この教師は教え子たちに楔を打つのを忘れはしなかつたが。

「ここまでお膳立てされたのです。よもや、最後の一撃を見誤る事は無いと思いますが。」

「で、どうする。突っ込むか。」

最も楔を強く打つておきたかったであろう大男から、少し焦れた

ような言葉がアロアへと発せられた。

「いや、重装兵に突っ込むのは得策じゃない。」

直接楔を打たれたのだ。ここで見誤ると後で何を言われるか、想像したくもない。だが、隣の大男に色白男の最後の言葉を伝えても無意味であつたろう。楔で固定される程、この男の思考は固くは無いのだから。むしろ楔が柔らかすぎる思考の中に埋もれてしまうだろ。

だから、楔の意味を解する者を呼んだ。

「ムリエラ。」

一瞬、停止するかに思えた30程の部隊の動きが再び早まった。

「来るぞ。前方へ、構える。」

カリファは再び声を発した。その声に反応したのか、目の前の重装兵たちがあ互いの距離を縮め密集する体制をとつていく。幾名もの重装兵が隙間なく目の前の敵へ構えるのだ。それは傍目にも鉄壁の防御に思えた。

「よし。そのまま、来るぞ。」

カリファが三度発する。

彼が指揮する重装兵はさすがに重厚な装備だけあり、王直下の護衛部隊として編成されていた。だが、その全身銀色に輝く装備は一介の兵達にはとても揃えられるものではなかつた。身に着けているものの高価さは、今こちらへ突撃してくる敵部隊と比べても一目瞭然である。それだけの装備をそろえられる者達、彼ら重装兵は皆イメラタ族の上位貴族の子弟なのだ。この本隊自体、貴族の割合が前線の部隊に比べて非常に高いものであるが、この部隊に関しては構成員全てが貴族であり、しかも将来の上位貴族なのである。

更には、返り血と砂・泥で汚れの糞を極めたような敵兵達と比べ、彼らの鎧には血のりどころか傷一つついてはいなかつた。それは、特段彼らが綺麗好きな訳ではない。この部隊が戦場において、直接

敵とぶつかった事が無いことによるものだつた。

最も、王の護衛部隊がそう頻繁に交戦する訳もないが・・・。

日頃の訓練こそ人並みに行つてはいるが、実戦経験の極端な少なさは戦場で隠しあおせるものではない。だからこそカリファがここに至つても細かく指示を出さなければならぬのだ。

カリファ自身は戦場の前線で戦つた経験など覚えきれないほどある。それ程上位貴族ではなかつた彼が王に侍るほどの地位に来たのは、戦場で積み上げた功によるものなのである。

しかし、その積み上げた功により、王の傍へ近すぎた感が最近はしていた。王の近衛部隊の隊長は、地位こそ他の將軍達より上位であつたが、指揮できる兵は実戦の経験も無いお坊ちゃん達である。しかも、戦場においても王の傍を離れる事ができず、戦況を見守るしかないのだ。前線での戦術レベルで力を発揮こそすれ、軍師として戦略を描く才など大して持ち合わせていなかつたカリファである。その地位は少なくとも楽しくは無かつた。

そこへ久しぶりの前線へ立つ機会がやつてきた。

王の護衛たる彼が前線へ立つこと自体、軍としては喜ばしいことではなかつたが。しかし、カリファの血が久しぶりに猛つているのは確かな事だつた。

恐らく、目の前の敵と自らが指揮する部隊とでは力量に大きな開きがあるだろう。それは僅かな戦力でここまで来たことで十分に証明されている。

だが、対応さえ間違わなければ彼らが破られるることは無いはずだ。少なくとも負ける事は無いはずなのだ。

経験の差はここに至つてはどうしようもないが、その差を埋めるほどの装備と人数がこちらにはある。経験だけが戦力ではない。財力にものを言わせた装備とて、十分戦力となるのだ。

しかも、ここで彼らに与えられた使命は目の前の敵を打ち倒すことではない。この場を動かないことが使命なのである。なるほど、この場の勢いは敵に優位であることは認めざるを負えな

い。だが、敵戦力はこちらに比べて三分の一にも満たない。しかも、カリファの目の前に進出してきた敵部隊はわずか30人程度だ。その敵がここまでイメラタ本隊に対して優勢を続けているのは彼らの勢いによるものであり、それを成しているのはイメラタの混乱なのだ。

つまり、イメラタが通常の戦力、その数の多さに見合った戦力を発揮できれば敵を圧することは容易なのである。いや、すでにイメラタの本隊内部に進出してしまった敵部隊は逃げ場が無い。全滅させることもたやすい。

そしてそれに必要なもの、それは時間である。しかもイメラタ本隊が正気を取り戻すための僅かな時間。それさえ作ることが出来たら、彼らの勝ちとなるはずだ。

その時間を作り出す。これが彼らに与えられた役割であり、そのためにこの場で敵の進出を止めるのだ。彼らがここで踏みとどまれば敵の進出も止まり、時間も自然と生み出される。

踏みとどまるだけであれば、日頃の訓練の成果さえ発揮できれば可能なはずだ。

序章 そんな小さな想い、の物語（10）

敵は一丸でカリファの部隊へと向かつてきただ。

「来るぞ。槍を前へ。」

鏡の様な盾と盾の間から、これまた銀食器の様に磨かれた槍が前方へと突き出された。

「腰を落とせ。踏ん張れよ。」

彼が前線で槍を揮つていた時に指揮していた部隊ならば、ここまで部下に行動を強いる連續した指示はいらないだろう。だが、今の配下の部隊にはこれでも足りなく感じた。甲冑に隠れた部下たちの表情は背後で指揮するカリファには窺いようもなかつたが、部下たちの緊張の度合いは厚い甲冑を通した背中からでも十分に伝わつてきた。

しかし、ここまでにはカリファの命を忠実に実行してきている。前へ突き出された槍には十二分に力が込められていた。これならば、こちらへ来る敵を貫くのに不足は無いであろう。

だが、その槍が血に染まろうと思われた時、敵は進行方向を急に変えた。

「やはり。」

思つた事がそのまま口に出るのは、カリファの直情な性格故だつた。

カリファとてこのまま敵が無謀にも彼らへ突つ込んで來るとは思つてはいなかつた。ただ単に、重装兵に対して無為に特攻をかける猪突な敵ならば、イメラタ本隊をここまで混乱させられるはずはなかつた。

「右だ。構え。」

彼らの目前で方向を変えた敵はカリファの右手へと進行方向を変えた。そして、來た。

幾数の悲鳴があがつた。

敵からではない。

初めての実戦で、数人が剣を合わせる事すら無く倒れていった。

前方の敵へ構えを取つていた重装兵はカリファの命で右へと構えを変えた。上官からの命を素直に実行する。さすがに絶対的命令者である王に近い者達である。命を言われるがまま実行した。だが、やはり経験が足りなかつた。

身を右に向けたまでは良かつたが、その行動に他の者への配慮は全くなかった。若き重装兵達は皆個々で方向転換したに過ぎなかつたのだ。部隊としての行動にはならなかつた。重装兵の鉄壁さは集団であるからこそ最大の効果を發揮する。本来ならば今まで前方に対して横一直線だつた隊列を、右側に対し並びなおさなければならないのだ。「点」では無く、「線」として動かなければならない。しかし、今彼らは個々に動いてしまつた事により、全体として大まかに右へ向けたものの、先ほどまで綺麗に描かれた「線」は複数の「点」としての強さとしか持てなくなつてしまつた。

そこを敵につかれた。

若干であつたとは思う。だが、わずかにずれたその隙間が敵の侵入を許した。

隙間をついた刃が数人の重装兵をその場へ落とした。

最早若干の隙間ではなくなつた。それは大きな穴となつた。

しかし、カリファは若き兵では無い。

「第一陣、前へ。」

40程の部隊が崩れようとしていた味方の内側から現れた。

それは、前の部隊とは違ひ隙間が容易に見いだせない「線」としての構えを取つていた。

自らが率いる部隊が経験の少ない部隊であり、その経験の少なさの最大の弱点が急な状況変化への対応である事くらいは、カリファは

十分にわかつていていた。

その弱点を、対峙してすぐについた敵は流石にここまで来た者達である。

だが、その弱点を認識していたからこそカリファはそこへの対応を行つた。

部隊の全力を持つて敵に当たらせる」ことはせず、部隊をあらかじめ一つに分けた。そして第一段階としてはその内の一部隊のみで敵に当たらせた。

そうすることで遊軍を作り、恐らく起こるであろう綻びに対処させる作戦をとつた。

半数では敵に対する圧力も半減してしまうが、それでも敵を上回る兵数である。倒すことでは無く守ることの目的であることと、彼らが守ることに関しては最も力を発揮できる重装兵である事から、それは可能と判断した。

そして、悪い予測ではあつたがカリファの考えた通り、第二部隊を投入する機会は來た。

方向転換により隙が出来た第一部隊と違い、この第一部隊は敵が突撃地点を変更する時点ではまだ構えを取つていなかつた事、第一部隊に穴が開くまでの僅かいえども時間があつた事により、自らの力を發揮できる態勢を持つて敵と対峙することが出来た。

「よし。そのまま踏ん張れ。第一陣は第一陣の後方へ。」

第一陣と対峙した敵部隊の進軍が衰えたのが見て取れた。

「うむ。」

カリファが頷いた。これならば勝てる、そう確信した。

敵の攻撃はまだ続いている。恐らくこのままいけば第一陣も破られるだろう。それほど敵の戦闘力は凄かつた。重装兵と正面から対峙して圧するなど通常の戦闘力では考えられない。恐らくは個々の武力も一般の兵を大きく上回るのであろう。カリファの目の前ではまた一人、若き兵が倒れていつた。

だが、それでも敵の勢いは一瞬で彼ら全てを滅するほど圧倒的ではなかつた。いつかは抜かれるであろうが、敵の勢いはこの陣を崩すまでに「時間」が必要となる程度のものになつてゐる。

そう、カリファが作らなければならぬ「時間」は十分にできる。敵部隊がこの陣を抜くころには、その「時間」によつて驚愕から脱した味方が逆に彼らを圧倒するであろう。

時間をかけ守ると言つこの戦いに勝つた。そう、カリファは確信したのである。

「第一陣。第二陣後方で構え。」

その思いを更に強固にするべく命を続けた。

若輩部隊を指揮するとなつた時、カリファは引退を考えた。恐らく最早戦場の中で自らが高揚する機会はもうないのであるから、と。地位では無く、より自らを奮い立たせるため戦場へ立つたのである。身を安全にするためではない。

しかし、生まれ育つた民族が次第に弱体していく中、自分のみが安穏とすることに対する後ろめたさが、彼を未だに戦場に立たせていた。

心奮えぬ戦場が続いていた。

だが、立つことはもう無いと考えていた前線へ立つことが出来た。率いる兵は弱兵ではあるが、それをもつてでも十分な指揮ができる。しかも、対峙した敵は少数といえども強兵である。

そしてその敵から勝利を奪い取る栄光も見えたのである。カリファは久しぶりの充足を得た。

序章 そんな小さな想い、の物語（1-1）

「カリファ様。」

耳元でカリファの平静を破る声が上がった。

「ん。」

カリファは視線を回した。

すぐ傍から聞こえたと思ったが、回した視線の先に対象の者はいなかつた。周りの者は皆第一陣の激戦へと視線を落としていた。声は思ったより後方遠くから上がつたようだつた。

「カリファ様、敵です。」

再び声が上がつた。

余程カリファの平穏を壊したいのか、先ほどより甲高い声色だった。

「なに。」

だが、カリファの心を乱すには十分だつた。今度は正確に声を発した者へと目をやつた。その者は顔こそカリファへと向けていたが、顔を向けた方向とは反対側へと力の限り指を向けていた。そしてその顔は、自らの表情などよりも指先を見てくれるよう嘆願する思いが溢れている。せかされるがまま、その指先の更に先へとカリファは目を持つて行つた。そして、そこで部下の表情の意味を知つた。

「なつ・・・。」

短い言葉でしかその思いを表現できなかつた。

後方に十数名置いていたはずの兵達が全て地にひれ伏しているのである。

そしてそこには明らかに重装では無い人影が一つ。

カリファに数秒遅れてその光景を目にした者たちは、またしても驚愕の中に身を投じてしまつた。先ほどの報告者と同様の甲高い声

を、異口同音に影へと投げつける。

「何者だ。」

その様な事など聞かなくてもわかる。

これまで戦場で培つてきたカリファの胆力は多少の事で思考を停止したりはしない。

影がこちらへと駆け出した。

「負け、か。」

停止しない思考は惣つた。そして、発した。

驚愕の混乱の中、健気にも影へと対峙しようとする若者が剣を前方へと構える

だが、その手は震えが止まらないようだ。振動が構える剣にまで伝わっている。

「よい。逃げよ。」

先ほどまでの緊張を強いる声では無い。年寄りが若者を諭すような声色だ。

「逃げるのだ。」

再び、今度はより大声があがる。

若者の混乱が声により一瞬飛ばされた。その一瞬の間に若者は駆け出した。

そしてその者の姿は波となつて他へと波及していく。

「見誤ったか。」

もう聞かせる者がいなくなつても、カリファは声を発した。

例え自らが充足の中に溺れていたとしても、十数名の部下が倒れる様に気付かない事は考えられない。だが、今向かつてくる者たちはそれをカリファに気付かせることのない速さと業で成し遂げたのである。

その様な力ある者達の侵入を許した事、見逃していた事、それが

敗因であろう。

いや、それを見逃してしまった程、第一陣そして第二陣へと突入してきた敵部隊の力は凄かったのだろう。それ程の力を有する部隊に、その誰よりも強いであろう者が抜けているはずがない。そう思い込んでしまったのだ。

僅か一人ではあるが、震える剣しか持ちえない部下たちにそれを止められるとは考えられなかつた。震えを止めるための、重装による圧力も今は反対側で戦闘を繰り広げている。今思えば、逆に敵との交戦によりその場に釘づけにされている様にも感じ取れる。

この急な変化に部下たちが対応できない事は指揮してきたカリファアが最も分かつていた。

ゆっくりと槍を構えた。

接近戦である。本来ならば構えるのは剣なのであろう。だが、得物の違いはこれから結果に大した影響を与えない事は容易に感じられる。

ならば、ここで持つのは長年己の全てを駆けて来たものが良い。やはりこの槍は手に馴染む。

一つの影の、小さい方の剣がカリファアの槍と一度まみえた。
三度目は無かつた。

具足を脱ぎ静かに生を終わらせるのに煮え切らぬ寂しさもあつたが、それを受け入れようとする自分もあつた。

だが、こうしてみるとあの時受け入れなくて良かつたと思つ。

戦場の喧騒も血の匂いも鎧の重さも、全て今まで自分を育ててきたモノたちだ。そのモノに囮まれながら終わるのだ。これ以上を望む事などできはしない。不器用を恥じる事もあつたが、これで良かつたのだ。考える事が少なくて済むのだから。

最後に何か一言発しようとしたが、それはかなわなかつた。

鎧で身を包んだ敵に対して最も良い攻撃手段は、前面へと開いた

顔面か喉への突きである。カリファも若き頃何度も教わり、戦場で実践し、若き者達に教えてきた。そして今、実践させられているのだ。

なるほど、確かに有効な手段だ。

最期の、音を発せぬつぶやきだった。

序章 そんな小さな想い、の物語（1-2）

直情なる長身の男から剣を引き抜いた。

血糊の量は多いがまだ振るえない程ではない。それを確認すると目を少し先にやつた。

喧騒が大きく波打つている。

数十の目がこちらを向いている。確認こそできないがその目には恐怖が写っているのだろう。一瞬の接触ではあるが、彼らが戦場の経験が少ない者達であることは容易に推測できた。その中で一人気を吐いていた者の姿はだからこそ大きく映つたし、この部隊がその者に依存している事は嫌でも感じられた。

その依存の対象が静かに倒れた光景は彼らには恐怖に見えたのだろひ。

喧騒が更に大きくなる。

戦場の中で最も聞く機会がある、殺し合いの際の怒声では無い。恐らくその次に聞く機会が多いであろう、混乱の声である。そして、この混乱の声は戦場からの逃走と同位の意味を持つ。

最早右も左も無い体で、先ほどまでの煌めく鎧が散らされていく。

「次だ。」

隣の大男へ声を出した。

これ以上彼らが目の前で蜘蛛の子を散らす若者たち（と言つても彼らの同程度の若者であるが）に対し行動起こす必要はないだろひ。

田指すのは一つである。

「アロア。」

戦場の喧騒の中であつてもこの男の声はよく聞こえた。
「やつらが逃げて行くぞ。」

それはアロアにもわかつた。

目指していた本隊旗、十数本掲げられている赤い旗の中でもひと
きわ目立つ金の縁取りがされた旗。それが、遠ざかっていく。

だが、それはどう言いつくろつても整然と遠ざかっていく様では
なかつた。

旗の元にいる兵達はおよそ20人、その中に周りの者達より小さい姿ではあるが金の鎧を纏つたものが一人。恐らくそれがイメラタ族の長であろう。敵の族長がまだ年端もいかぬ者だと言う事はアロアも聞いている。どのような事情かはアロアにはわからないものだつたが、数ヶ月前に族長となつたらしい。

その者を中心に20名程度の一団がアロア達を背に走つてゐる。だが、その後ろ姿は全く統制がとれていない。それはそうである。その者達の進む速度が点でバラバラなのである。彼らの内数名は騎乗であるが、ほとんどは地に足を付けての逃走。

本来ならば騎乗の者達のみで駆ければ相当な速度を出せるのであらうが、なぜか彼らは徒步の者らの速度に合わせようとしている。徒步の者達の身なりが、大身でなければ身に着けられないものである事が関係あるのだろうか。

アロア達がたどり着いた、恐らく本隊旗があつたであろう場所には數十頭の馬が柵につながれたまま取り残されていた。その馬たちに着けられた馬鞍の豪華さから、逃げ出した大身の者らの馬である事が想像できた。

その状況からも、逃げて行く者たちのあわてぶりが窺える。

彼らもこれほどの短時間で親衛隊が破られるとは想えていなかつたのであろう。彼らにとつて馬に乗る間も与えられぬ速度で親衛隊が破られ、敵が迫つてきたのである。

いや、本来ならばもう少し時間はあった。短時間とは言つても馬にも乗る程度の時間を稼げないほど、親衛隊を率いたカリファは無能ではなかつた。彼は彼が率いる隊の最低限の仕事、王を安全に逃

がすための時間は作つたのである。それは僅かに1ファルにも満たない程度であり、カリファにとつては不満足この上ないものであつたであろうが、馬に乗り、逃げるには十分な時間のはずだつた。

だが、今、王を囲む20名ほどの兵は、そのほとんどが单なる一兵卒では無かつた。かと言つて経験豊かな勇士でもない。最も戦場の空氣に似つかわしくない上位貴族であり、カリファが前線へと赴いた後に残つた者たちは、その様な戦場の逼迫感を肌で感じ取ることが出来ないものばかりであつた。

上級貴族である彼らの戦場に立つた経験は、彼らの息子たちと同様に直接敵と渡り合つ事のない近衛兵としてでしかない。今では戦場においても王の近くに侍り、剣を抜くことすらないのである。そのまま彼らに数十レス先とは言え、一瞬を争わなければならぬ空氣を読むことなど出来なかつた。ましてや、自らが敵の剣先の対象になる事など想像すらできなかつた。

カリファが王に対して残した言葉も、それを実行しなければならない、王に侍る者らには届かなかつたのである。

とは言え、本来その空氣を読む役割を任せていたのはカリファ自身であり、それがいなくなつた後に残された者達に責任を押し付けるのは少し酷と言えるかもしれないが。

しかし、今彼らの背に敵が迫つているのは現実であり。空氣など読まなくても、目に見える危機が降り注いでいるのは理解できてしまうのである。

だが、ここに及んでも彼らはまだ自らの置かれた立場を正確に理解できなかつた。

全てが騎乗の者となれず互いの速度に差が生じているにも関わらず、彼らは一団となつて行動しようとした。そのため、本来出せるはずの速度を出せない騎乗の者達は、普段の怠慢のため一般の兵たちにはるかに劣る速度しか出せない者らに速度を合わせなければならぬのである。

当然ここで重要な事であるのは、彼らの中心の者である王を敵か

ら遠ざける事であり、その王が遠くへ逃れる事が出来たのなら彼らも安全になるはずなのであつた。

迫りくる敵にとつて重要なのは王と本隊旗だけであり、それに侍る者達など興味もなかつた。

いや、正確には全く興味が無かつた訳では無い。いくら戦場において無力とは言つても彼らは紛れもない上位貴族であり、立派な首級となるのだ。

だが、今の敵であるアロア達にはそこまでの余裕はなかつた。王、と言う一点に全精力を注ぎ込んだからの猛攻であり、それ以外に振り向ける力などどこにも無かつた。

だた、侍る者達にはそれがわからなかつた。

敵は自分たちの鼻先まで来る力を有するのだ。その力の巨大さは嫌でも伝わって来る。そして、その巨大なモノが自らを滅するほどの大きさが無いとは到底思えなかつた。

この短慮への原因、その全ては戦況を正確に理解できる歴戦の者を自らの近くに置きたがらなかつた彼らの傲慢さと、かといって自らが歴戦の者になろうとはしなかつた彼らの浅慮にある。そして不幸はそれを良とせざるを負えなかつたイメラタの歴史にあつた。

(勝つたか・・・。)

フーレスあまり先で、遠田にもわかるほど慌てふためく集団の後ろ姿を視界にとらえてアロアはそう呟いた。だが、言葉には発しなかつた。

彼らが今立つ場所はつい先ほどまで敵本陣があつた地である。余程慌てたのだろう、陣幕がそのままなのは当然として、戦場には似つかわしくない煌びやかな装飾品が散在している。恐らく、族長かその周りの者達の私物であろう。この様なものを戦場に持つてくるなど、勝ち戦しか頭に無かつたのだろうか。いや、所詮フイガロもイメラタもその中心にいる者達が考える事にそう大差は無いと言つ事なのだろう。

その装飾品の所有者であつたであろう達の後ろ姿は、色白男が立てた作戦の目標が達せられた事を意味した。

その目標とは、本隊全体を驚愕に追い落すこと。

そして視線の先の後ろ姿は、それが成功したことを意味した。

これでイメラタ本隊は完全に機能不全に陥つた。目の前で驚愕の体を隠そうともしない者たちを見る限り、そう簡単に機能不全が治るとは考えられない。

本隊機能の停止。それはすぐに前線に伝播するに違いない。他力本願では無い、これからアロア達が前線に伝染させるのだから間違いない。

本隊の崩壊と言つ驚愕は、それが間接的に伝えられた前線をも驚愕に落とすだらう。フィガロがイメラタ前線を破り、ここまで到達するのにそう時間は要さないはずだ。

「フィガロを勝たせる」と言つ目標は達せられたのである。

だからこそアロアは思った。

しかし、まだ言葉を発するには早かった。

色白男の責任は終わつたが、まだアロアには隊を率いる者の責任が残つていた。

だからこそアロアは発した。

「行くぞ。」

まだ行ける。

そうアロアは判断えた。

二人は駆け出した、少し遅れて完全に霧散した重装兵を突破した30名弱もついてくる。

この程度のイメラタを覆う驚愕では、フィガロ本軍がこの地までたどり着くまでに正気に戻つてしまつ。今、この地に立つアロアはそう判断した。机上ではわからない判断だ。

恐らくこのまでもフィガロは勝つだらう。だが、アロア達は正気に戻ったイメラタ本隊によって潰されてしまう。

彼らが正気を取り戻す頃には恐らく前線でフィガロが勝利を手中に

しており、最早全体の劣勢を覆すほどの力も時も有していないだろう。しかし、身中の小虫を揉みつぶす程度の力ならば、正気を取り戻した彼らには十分にある。

しかもイメラタ本隊だけでは無く、恐らくここを通るだらう壞走するイメラタ前線の部隊も追加される恐れがある。自分たちの数十倍の数である上に、手負いの敵である。手ぶらで逃げる事を良とせず、軽く捻り潰されてしまう可能性もある。

だが、アロアにどつてここで最大の目標はフィガロを勝たせることでは無かつた。アロア達が生き残る事こそ最大の目標なのである。

彼らにはフィガロのために自_己を犠牲にするほど、愛国心も、王に対する義理も、ましてや忠誠心もないのである。

そのためには、イメラタ本隊に驚愕から目を覚ますまでこの地にいても「う」と言つ、のんびりとした時間を与える訳にはいかない。目を覚ました時にはアロア達から遠く離れていてもらわないといけないので。

つまり、フィガロ本隊の到着後などとは考えずにこの場でイメラタ本隊には壞走してもらつのだ。その壞走のために必要な事は、イメラタ兵達に踏みとどまる事の意味を無くさせる事であった。

イメラタ兵が驚愕の中でもこの地に踏みとどまる理由はここに族長がいるからである。彼らの長がいるからこそ、この場を離れる事が出来ず、足に根が生えてしまつているのだ。

ならば、その理由を消してしまえばいいのだ。

その壞走のための起爆材としてアロアが考えたものは、だが、族長では無かつた。

族長はすでに騎乗の者となつてゐる。今は周りの者等の驚愕の中で思つよつに馬を走らせることが出来ないようだが、もし単独でも逃げる氣になつた場合、徒步のアロア達との機動力の差は歴然である。見たところ子供と思われる長とて、馬に任せて走るのならば向

かう先せいでみて、アロアの手の届かぬ所へ行ってしまつ可能性
は高かった。
なれば族長に代わるものと田舎せばよい。

序章 そんな小さな想い、の物語（1-3）

族長の一団との距離はすぐには縮まらなかつた。

纏まりのない集団とは言え、彼らも必死なのである。しかも、彼らを覆う驚愕は徐々に逃げると言つ感情に対して劣勢となりつつあるようだ。少しづつ彼らの足並みがそろい始めた。そして、徐々に追うアロア達との進行速度の差をなくしていった。

不思議なものである。普段より走り回つてゐるアロア達と、戦場においてですら自らを飾る事にしか興味のない彼らとの脚力の差は比べるべくもないはずだ。だが、恐怖と言つものは普段の鍛錬などと言つ、表面しか覆わない力をこうも簡単に凌駕してしまうのか。

これ以上は距離が詰まらないだろうといつて一点が来た。

互いの距離、約30レス。

その時、アロアの声が上がつた。

「カルツェル、槍。放て。」

恐らく、先ほどの重装兵部隊との戦いの中で拾つたのであらう槍が、声の先の主の手に握られていた。

「おう。」

そして放つた。

通常の者より少し大きいであらう槍だつたが、放つた者にはまだ余力を持たせる程度であったのか。その対象とされた者は気付くこともなかつた。音もなく空氣を切り裂き、槍は対象となつた不幸な者の胸を貫いた。

ただ一目散に前へ前へと逃げていたその者は、この集団では数少ない浅民であつた。上位貴族達によつて大半を構成されていた集団であつたが、王の傍らで役目を果たさなければならない者たちもいた。それは王の身の周りを世話する小姓や馬の世話役など、共に逃げる貴族達には生涯縁の無いであらう任務である。

そして、今胸を貫かれ倒れていく者もまた任務を負つていた。

彼は一人倒れたのではない。彼と共に彼の身長の3倍はあるでありますモノが倒れて行つた。

イメラタの本隊旗であつた。

アロアが狙つたもの。それはイメラタ軍の本隊旗だつた。

これならば族長に代わるものとしての価値は十分ある。金の刺繡を施したその旗は長のいる場所を、存在を表すものである。

いや、一軍において遠くからでも率いる者の存在を示す役割を与えたその旗には、長その者を捉えるよりも効果があるはずだ。遠目に存在を見る事が出来ない長よりも、全ての者が認識できる大旗の方が軍の中では影響力がある。

だからこそアロアはこれを狙つた。騎乗の長とは違う。この巨大な軍旗、そしてそれを持つものが徒步であることを考えれば、そう簡単に遠くへ逃げる事も出来はしないだらうし、こちらも見失うことはない。

逃げ続けるその団の中で倒れたのは、旗を持つという不幸を背負つた一人のみであった。

アロア達が槍に胸を貫かれた者が倒れた地点にたどり着いた時、王を囲む集団はもう100レスは先に行つていた。アロアが速度を落としたことと、彼らが前だけを見て走り続けている事によるその差だつた。今から再び王を追うことは難しいだらう。

だが、アロアの視線は倒れたものが握りしめている旗へと向けられた。

握りしめられたその手にもう血は通つてはいなかつた。だが、最後まで役割を果たそうとしたのだろうか、旗の柄は両の手で握られてしまだつた。

彼のみを犠牲とした一団は、彼が果たした役割を誰も引き継ぐことなくこの地を走り抜けたのだろう。

戦場にいる全ての闘つものにとつての心の拠り所は目に見えてることのない王では無いのだ。遠くにしか見る事が出来ないが、常に彼らの中心にいる本隊旗なのである。

彼らが長にいくら忠誠心を燃やそうとしても、目に見えぬものに対し、いつまでも熱さを保つことはできない。だが、目に見えるモノならば、例え対象が人でなかつたとしても思いを乗せる事はできる。そして、それに対しても自らの誇りを乗せる事が出来るのだ。それを置き去る事の意味を解する者はその一団にはいなかつたのであろうか。

いや、もしいたのなら倒れていく者から奪つても、多少追跡者との距離が縮まるとも、旗を掲げる役割を引き継いだのだろう。感傷に浸るほど間は与えられていなかつた。だが、色は違うがその本隊旗を常に見上げているアロアには、見上げる者達と掲げる者達との心の隔たりに思いが行つてしまつ。本隊旗の柄を握つたまま倒れた者の手を見ると、その思いがどうしようもなく込み上げてしまつ。

だが、

「勝つたな。」

今度は言葉に出すことができた。

敵本陣があつた後方で、大きな声が上がる。
声だけでは無い、銅鑼も聞こえてくる。

それは勝ち鬨だつた。

ペイジュエ公の隊が追い付いてきたのだろうか。敵の本隊旗が倒れる様を確認して上がつた勝ち鬨なのだろう。

振り向いた先にはペイジュエ公の傍らに色白男の顔も見える。その彼に急かされるように再びペイジュエ公から勝ち鬨が上がつた。そして銅鑼の音も続く。

これで前線までイメラタ本隊での出来事が伝わるだろ。

最早イメラタ軍でアロア達を意識の対象にしている者は無かつた。彼らを率いる軍旗が彼らの視界から消えた時、彼らのここにいる意味も消えたのだから。今の意識の対象は自らの故郷の方角へと走り続ける事だった。

「ふう。」

ようやく息をつくことが出来た。

「カルツェル。」

横で壊走するイメラタ兵を不思議そうに見て、大男に声をかけた。

「みんなのところへ戻るぞ。」

自分の目線程の位置にある肩へと手を置いた。

「ああ。」

流石に眠気は抜けた声が返ってきた。

序章 そんな小さな想い、の物語（1-4）

アロア達の一度目の突撃が始まつてからイ梅ラタの壊走まで1ルムの時間も要さなかつただろう。だが、これは結果としての短時間での決着ではなかつた。逆にアロアとしてはこの短時間で終わらせることと、初めの突撃をあの機会で始めなければ勝機は無かつたのである。

一度目の突撃時は開戦からすでに1ルムが経つてゐる所であつた。フイガ口王の性格からして開戦早々のフイガ口猛攻による激戦は初めから予想された。それにより、イ梅ラタ本隊の注意も最大限前方の主戦場に払われる事になり、後方からの小隊の奇襲に注意が緩慢となつた。更には、本隊の前方と後方での注意の向け先が同一になるまでに時を要し、最後まで1000人の戦力を十分に發揮できなかつたのである。

朝靄が明けきらない好機もあつたが、第一の突撃を「あの時」に選んだのはそれが第一因であり、全てだつた。朝靄は单なる副産物に過ぎない。

この戦いはイ梅ラタ本隊の壊走から始まるイ梅ラタ全線の崩壊での決着となつた。だが、本隊壊走の瞬間、その一時に目を向けると、他のイ梅ラタ軍の状況はそう悪いものではなかつた。

まず、主戦場では開戦当初のフイガ口猛攻によつて押されていたものが、フイガ口王からのただ一つの命「目の前の敵を殲滅せよ。」で動いていたことと、自分達自身の統一されぬ動きによる疲れも相まって、徐々にイ梅ラタが押し返し始めていた。いや、初めの猛攻に耐えたイ梅ラタにとつてその猛攻を受けなかつた左軍2000がいるのだ。左軍2000が開戦時相対したのはフイガ口右軍1000であつた。この戦場において、イ梅ラタ左軍はこの時点でほぼフイガ口右軍に対する優位を確実にしていた。フイガ口右軍は何とか

壊走せずに持ちこたえていたと言う状況にまで追い込まれていたのだ。この行動が自由になりつつあった左軍を疲れが見え始めたフィガロ本隊・中央軍にぶつける事によっての反抗が開始される瞬間でさえあつた。

そして、イメラタにはもう一軍がいた。右軍1000は敵軍が全くないことに警戒しながら（イメラタとて、まさかフィガロが天王山とも言えるクエルランスの丘を、もろ手を挙げて放棄するとは思わなかつたのだろう。）昨日までフィガロ本隊がいた丘を登り終えたところだつた。そこから見下ろせば、フィガロ本隊が横つ腹をこちらに向けているではないか。

態勢を整えて丘を下りだすまで、そう時を要しなかつたはずだ。そう、右軍の僅かな遅れがあつたものの、もうあと少しで勝利はイメラタの手に落ちる所であつたのだ。

だからこそアロア達は急いで決着をつけなければならなかつた。決定的とも思えたイメラタの勝利を覆すために、彼らに与えられた時間はそつ多くはなかつた。

アロア達はその与えられた時間を1ルムと考えていた。

それが短時間で終わりしかも多少余裕があつたのは、イメラタ本隊のアロア達に対する感度が想像以上に低く、そのため二度目の衝突時の反応が緩慢になつた事でその後の流れも想定より前倒しで進んだ事が一つ。更にはイメラタ右軍が自軍の速度を自らの思い違いにより遅らせた事による幸運によるものだつた。

だが、それでも当初はこの制限された時間の中での勝利は厳しく思えた。

「本当は、時がもう少し欲しいのですが。」
色白であるはずの男の顔は少し曇っていた。

「難しいか。」

その曇りは隣のアロアにも見られるものだつた。

「はい。恐らくイメラタの本隊までは届くと思われますが、・・・

やはり厳しいです。

「そうか。」

敵本隊までの道筋は見えた。だが、同時にその道筋は相当の時間を要する事も予想された。その、相当な時間が費やされる合間にフィガロ軍自体が敗北している可能性が考えられた。

目を閉じて考えてみたが、それだけでは名案は出てこない。

「イメラタ本隊内の具体的な部隊配置がわかれればもう少し何となると思われますが、そろばかりは敵を目にしなければわかりません。上手くこちらの突撃地点となる敵本隊右後方が弱い部分があれば、もしかすると・・・。」

「いや、だめだ。」

目を閉じたまま、アロアは却下した。

「ここに博打は持ち込めない。これは外した場合、間違いなくこちらが全滅となる作戦なんだ。」

「・・・はい。」

さすがにこれには従わなければならない。それに、彼とて運任せの作戦など立てる者にはなりたくないのだ。

「足りないのは時間だけなのです。その時間を作るものさえあれば。」

分かつてはいるが、名案などはそう簡単に生まれては来ない。教師も生徒同様目を閉じてしまった。

「ペイジュ工公以外に協力を求めてみますか。もう150人ほどの戦力があれば、その時間を生み出すことも可能になると思いますが。」

名案とは思えないものだつたようで、目を閉じたまま教師が発した。

「いや、それも難しいだろう。」

そして思った通り却下された。

「今日はペイジュ工公であればこそ話に乗つてもらえる可能性があるのだ。俺たちと同じ、イメラタによつて初めに蹂躪される可能

性があるからこそ。でなければ、単独での本隊からの離脱となるこの作戦に首を縊に振るほどの危機感を持つてはくれまい。」

実際に先ほどペイジュエ公の陣幕内で、アロアはその危険性をペイジュエ公に十分に植えつけてきた。あれならばこの作戦に乗らせることは可能であろう。ペイジュエ公は自らの隊の行動に対して、アロアの言に耳を傾けるとさえ言つてくれたのだ。

だが、危機感が無い者にいくら言つたところで、王の不興を被る可能性のある行動を採用するとは思えない。

「それに、あまり大勢での行軍となると、敵に気付かれる可能性が出てきてしまう。その上、今立てた小隊だからこそ可能な動きも取れなくなる。それではこの作戦の根本から考え直さなければならなくなる。」

二人の教師と生徒は共に黙りこくつてしまつた。

だが、この場にはもう一人、沈黙の蚊帳の外に置かれた者がいた。

「こら。何を一人して黙つてるの。これじゃ話し合いにならないでしょう。」

怒声が響いた。

「暗いつたらいいわよ。」

怒声が続いた。

さすがにこれには教師も生徒も目を開けざるを負えなかつた。

「いや、ちょっとと考えてただけなんだが。」

「そうですよ、好きで黙つてた訳ではないですよ。」

と、反論を試みてみる。

「知らないわよ。」

あつさりとはねつけられた。

「私がいる中で一人が黙つて目を瞑つてどうするの。私に一人で話せつて言つの。」

（いや、今一人で話し始めたじゃないか。）

一人の声は心の中で協和した。

どうもこの人は教師にも生徒にもむいていないようだ。教師にし

ては生徒が逃げてしまうし、生徒になつても教師が逃げてしまう。

「悪かつたよ。だからそんなに大声を出すな、ミリィ。幕の外にまで聞こえるぞ。」

取りあえず詫びの言を入れたのは、長いことこの大音声と付き合ってきたアロアの英断のはずだった。

「誰が大声女ですって。」

だが、それが英断ではなかつた事は即座に判明した。

再び大声がアロアの頭上に降り注いた。

「いや、悪かつた。許してくれ。」

もう英断も何もなかつた。謝り倒すと言つ、人類が生み出した下策中の下策にすがるしかない。

「また、アロアは謝れば良いと思つてるんでしょ。いつもそつやつて。私は猛獸じやないのよ。」

やはり使い続けると効果が薄くなつてしまつるのは下策たる所以なのだろう。

「わかつてるつて。だから、『ごめん。』

「もう。・・・しようがないなあ。」

だが、下策とは言つても策である。なんとか彼女の怒りは収まる方に向いてくれたようだ。

「いえ・・・。」

なのに、それを否定する言葉を吐く者がいた。

「これは良いかもしません。」

・・・とは言え、どうも単に裏切りへと走つた訳では無いようだ。

「・・・何が良いのよ。」

だが、このお嬢様の気には障つたみたいだ。

今度は第三者の立場に立つたアロアが男を見る。祈りの色を映した瞳で。

「いえ。」

再び男は同様の言葉を発した。彼女の言葉に反応はしたものを見たる興味は示していない様子だ。

「・・・どうしたの。」

彼女もそれには気付いたと見える。語氣に先程の怒氣は含まれていない。

彼女も隊を率いる一人なのだ。そういうつまでも、怒氣を振りまき続けられる立場でない。

「うん。」

何かに納得したのか、頷きの動作と共に声が出た。

「・・・アロア。大声は良いと思います。」

「は？」

（この男は何を言い出すのだ。）

思わず裏返った声を出したと同時に、アロアはこの男の神經を疑つてしまつた。アロアが無い策を絞つて収めたモノを起こしていつと叫ぶのか。

「・・・なんですって。」

（ほら。）

アロアが首をすくめた。アロアの隣で收まりかけていた怒氣がみるみる膨らんでいく。

「アロア、確かペイジュ王公の隊には楽隊がありましたよね。」

（俺を巻き込まないでくれ。）

怒氣の空間から逃げ出そうとするアロアにこの男は話を振つてた。アロアの体が気持ちと同様にわずかに後ろへと逃れようとする時、それが止まつた。

（ん？）

「・・・樂隊、か？」

「はい。樂隊です。」

どうやらこの男は神經を患つた訳では無いようだ。その時は先を見る者の光が宿つていた。

「ああ、あるぞ。王のお気に入りの樂隊がな。」

アロアの言葉からも暗さが消えていった。

「いえ、その様な喜びの音色はいりません。その樂隊には申し訳

ありませんが、今回は田ごろ磨いた技術はしまっておいてもらいましょう。ただし、その鍛えた叩き鳴らす腕力は十二分に發揮してもらいます。」

「と、言つと……。」

もう彼女も怒氣は発していない。生徒には成りきれないが、先を知りたい探究心は隠せなかつた。

「彼らに使つてもらつ樂器は一つだけ。そうですね、銅鑼で十分です。」

「銅鑼か……。」

「ええ。銅鑼です。樂隊であれば10個以上は持つてゐるでしょう。」

もう男の顔は笑つていた。

「それでいけるか。」

「はい。これで時間は十分です。」

「そうか。」

アロアにも笑顔が移つたようだ。教師が確信を持つて教える事に對して信頼を持つて頷く、それが生徒の役割だ。

「あ、でも大丈夫でした。樂隊には、この戦の後に日頃の技量を発揮する場所が用意されるでしょうから。」

生み出された時間はほぼ予測通りの1ルムあまりであつた。

そして、それは後から付け加えられた時間を除けば、ほぼ余さず使われた。付け足された好機もあつたが、それも吸い上げる事が出来たからこそ勝利であつたのだろう。

後にこの戦いは「ランタンの戦い」と呼ばれた。

コルドア内部へ侵入しようとする異教徒勢力を完全に駆逐する事が出来た戦い、長きに渡つたイメラタ族との争いの趨勢を決定づける戦いとして歴史に名前を残すことになった。

だが、これは後の話。当事者であるアロア達にとっては、勝利の

喜びと共に、自らの力が、単独では何もなせない程度である事を再認識させられた戦いに過ぎなかつた。

だが、主力同士がぶつかつたクリアランスの丘付近の名では無く、イメラタ本隊のあつたランタンがこの戦の名として選ばれたのは、「歴史」とは見るべきものを見ると言つ事なのであるひ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4914y/>

アロア戦記

2011年11月27日10時03分発行